



郷土史

ていね

第 88 号

平成 27 年 4 月 22 日
手稲郷土史研究会会報

第 107 回(平成 27 年 3 月 11 日)定例会の研究発表要旨

増毛山道の話し ～武好駅亭殺人事件～

前田 鈴木清士 氏



蝦夷地陸路の最大難所といわれた増毛山道は、北海道の北西部日本海の海岸部の石狩市浜益区幌から増毛町別刈を結ぶ、全長約 26.8 キロの山道である。この海岸線は、暑寒別連峰のすそが海に落ちる断崖絶壁に阻まれて、海岸線沿いに道をつくることは出来なかった。

このため、海岸線から遠く離れた標高千メートルを超える山々の尾根伝いのアイヌの連絡道を利用して細道を作ったが、身の丈を超す笹藪や熊に襲われて遭難する人が絶えなかったと云う。

徳川幕府は、幕末の 1790 年代ロシアの南下侵略に備えて、蝦夷地を松前藩から幕府の直轄領とし、東北諸藩に命じて要所要所に兵を駐屯させ、陣屋を構築した。このため陣屋と陣屋をつなぐ未整備の陸路を早急に整備する必要に迫られていた。

幕府は安政 2 年(1855 年)～安政 4 年にかけて、西蝦夷地各陣屋の連絡路として、浜益陣屋と増毛本陣とを結ぶ増毛山道の開墾を、増毛・浜益場所請負人伊達林右衛門に命じて整備に当たらせた。

林右衛門は、大勢の人夫を雇い 3 年の歳月、1,311 両の私費を投じて安政 4 年に山道を整備した。

開墾の直後にこの山道を通った松浦武四郎の勧告により、山道の間中となるウブシの沢に駅亭を設け、旅人たちの休息・宿所としたが、この駅亭に住み就いた六部により、16 名もの旅人が斬殺され、金品を奪われるという事件が起こったのである。

平成 4 年になって、この海岸線の断崖をトンネルでくりぬいて、国道 231 号線が貫通し、稚内から札幌・小樽方面への自動車道がようやく完成した。

現在、増毛山道は廃道となっているが、歴史遺産として復元しようとする運動が地元を中心に起きている。



次回の予定

次回(5月13日)は、研究発表、山本博会員の「港の先人たち」と村元健治会員「星置の歴史をあるく」を予定しております。
会場は、視聴覚室です。

平成 26 年度を振り返って

第 107 回定例会は、平成 26 年度最後の例会でしたので、後半は「平成 26 年度を振り返って」と題して、話し合われました。主に次の二つの話題がありました。

1. 新同好会（仮称＝手稲石の会）の設立について（発起人代表沖田紘昭氏の提言資料より掲載させていただきます）

北海道新幹線の札幌延伸工事がいよいよ現実となって、手稲山系の深層部分を通過する手稲トンネル（長さ 19 キロ）がにわかに脚光を浴びている。専門家の間でいま、最終的なルート確定作業が進んでいるが、旧手稲鉱山のほぼ真下を通過することは間違いない。

同鉱山跡地から現在でも希少な鉱物が採取されている。同鉱山の廃棄坑道から深部にさまざまな鉱物を包含する鉱脈が地球の奥深く伸長していることは、専門家の一致した見方である。新幹線工事で排出される掘削岩石は、これら各種鉱物の有無にかかわらず、指定の場所に投棄されることになっている。

この投棄岩石を黙過している手はない。手稲郷土史研究会に新同好会を旗揚げし、関係機関と協議のうえ、その一部を譲り受け、鉱物探査の場を新設しようとするものである。そこで、小、中学生、一般市民を対象とした鉱物探査会、研究会などを開催し、手稲の活性化の目玉づくりを目指す。

鉱物の探査、研究は、そのまま地球の生成過程をひもとく糸口であり、ひいては宇宙誕生のナゾを解明する手掛かりとなるものと確信している。私どもは、まず、同鉱山の排出岩石の探査を手始めに、鉱物博物館の設立を視野に入れている。そして、手稲区のキャッチコピーを「科学する手稲」と位置づけ、将来は宇宙博物館の創設まで具体化させようと遠大な夢を広げている。

[想定する主な事業]

- 1) 小中生、一般市民を対象とした鉱物探査会、研究会の開催
- 2) 鉱物博士の育成
- 3) 採取した鉱物の鑑定会、展示会、一部販売会の開催
- 4) 地球の成り立ちを考える講演会の開催
- 5) 鉱山神社の探査、見学会の開催
- 6) 星置川水系での砂金掘り大会の開催など

2. 平成 26 年度を振り返って（茂内義雄会長は、今までの活動状況を「機構図」として整理して、次のような主旨で話されました。）

当会の設立趣旨の一つでもある「郷土資料館設置」に向けての取り組みも本格化して来たが、これからはさらに充実した実践活動が望まれよう。その一環として「資料部（仮称）」を新設して、散在している資料を整理して、当会の会員に限らず区民が活用し易い環境づくりをしていきたい。

また、当会は創立して 10 周年を迎えることになり、そのための記念事業が次年度の事業の一つとしてあげられる。

手郷研クイズ（手稲鉱山ーその2）

『手稲鉱山のあらまし』に次のような記述があります。空欄に適した数字、語句を入れてください。

手稲鉱山では、(1) 種類以上の鉱物が産出され、様々な鉱物を産出する鉱山として知られている。特に(2)、(3)、渡辺鉱、リシエルズドルフ石といった珍しい鉱物や新鉱物が発見されて、世界的にも名の知れた鉱山とのことである。

(ヒント：『手稲鉱山のあらまし』 P.21 参照)

八咫人土居

★ 文芸サークル・開拓史研究部

3月の例会は、茂内会長の基調提言で「依田勉三」について学習しました。これは、平成25年3月の「石狩の歌」、平成26年3月の「十勝の春」に続く柿本良平著作の研修です。「石狩の歌」、「十勝の春」はモデルがいるのですが、フィクションのようです。しかし、今回取り上げた「依田勉三」は史実を調査して執筆したものであると書かれていたように記憶しております。フィクションであれ、ノンフィクションであれ、この3作品をとおして北海道を開拓した先駆者の苦勞を窺い知ることができました。

今回は、乙黒会員の御宅を会場にして研修を行いました。御宅に伺って驚きました。恰も資料館のようでした。写真でご紹介します。



データ整理部

「手稲歴史年表索引」が立花頭次氏のご尽力により出来上がりました。いま、立花氏は茂内会長の蔵書目録を整理中です。間もなく皆様に提示できることと思いますので、ますます資料活用が身近なものになることでしょう。資料を公開して下さる会長に感謝いたします。

手稲郷土史検索ゲーム

新発寒 小田真二

分科会の「データ整理部」によって、「手稲歴史年表」「知られざる手稲と加賀百万石」「札幌の昔ばなし」「手稲鉦山のあらまし」「山口運河」の索引ができました。

そこで、それを使って検索遊びをしてみました。

まず、「手稲」を探してみました。

「知られざる手稲と加賀百万石」に次のように出ております。

手稲村は、昭和 17 年（1942 年）まで、区域を上手稲村、下手稲村、山口村の 3 つに分ける時代が続きました。そして、この年に「軽川」と呼んでいた地名を「手稲」としました。

次に、「軽川」は、

「札幌の昔ばなし」に次のように出ております。

明治三十二年一月、軽川支場隣地に佐藤文平氏所有地五十二町歩余を購入し支場に属せしむとある。

明治三十三年六月、場主侯爵前田利嗣が四十三歳で死去し、利為が当主となる。

明治三十四年、軽川の南方の山地二百万坪を勝山孝三氏より譲り受け牧場や植林地にあてる。

以下、次のように続きます。

前田利嗣：「手稲歴史年表」

1894（明治 27）年 前田利嗣侯、堀農場の譲渡を受けて前田農場を開く（篠路村茨戸）。

堀農場：「知られざる手稲と加賀百万石」

札幌郡篠路村堀氏農場

堀基氏農場は札幌市街を距たること凡そ三里なる札幌郡篠路村字茨戸に在り総面積は凡そ三百四十町歩にして明治廿一年十月初めて業を起し内八十五町歩は既に開墾せり本場は泰西の農法に倣ひ主として牛豚を養育す故に耕作物を専ら燕麦、玉蜀黍、麦類、牧草、根菜の如き牛豚の飼料に供するものを多作す現今飼養する牛は九十頭、豚は三十頭、耕馬は十二頭にして廿四年中牛、豚、穀物類売却代金は凡そ千五百円なりしと云ふ

篠路村：「知られざる手稲と加賀百万石」

現在、3 代目にあたる豊田勇氏によると、祖母からの聞き伝えでは、祖父・石松は、この前田農場で帳場をしていたとか。会計業務を任されていたようだ。

その後、昭和 12 年 5 月には上川郡和寒村へ転出したと理解したい。

篠路村茨戸太所在の前田農場が、花畔村あたりにかけて農場の所有地を拡大したのは、なぜかまだ未解決である。

このようにゲーム感覚で、資料をたぐりながら手稲を調べるのも面白いのではないのでしょうか？